



Title	中国初期探偵小説論 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	藤井, 得弘
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13407号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74472
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Tokuhiro_Fujii_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 藤井 得弘

学位論文題名 中国初期探偵小説論

・本論文の観点と方法

本論文は、中国の小説史における清朝末期において、西洋の探偵小説が翻訳を通じて中国に伝来する経緯を踏まえながら、当時の中国人がいかなる背景のもとに、西洋の探偵ないしは探偵小説をめぐって、何を思索し、いかにして中国の「偵探小説」（中国語における「探偵小説」の謂）を生み出そうとしたかを論じたものである。具体的には、本論第Ⅰ部においては、超人的な能力を持つ裁判官による、裁きのおもしろさを骨子とする伝統的な「公案小説」の土台の上に、これを強烈に意識しながら、「偵探小説」という新しいジャンルを打ち立てようとする大きな趨勢があったことを明らかにする。また第Ⅱ部においては、その動きが、コナン・ドイルの「ホームズ物語」を模倣しようとする方向性を持つものであったこと、そしてその模倣は、中国社会の現実・後進性とのあいだに齟齬を生じざるを得ない、大きな困難を伴うものであったこと、それゆえにまた、「偵探小説」は、その後進性を明らかにし批判するという、清末における「新小説」に特有の「現状」暴露をテーマとしたジャンルとも軌を一にするものであったことを明らかにした。

・本論文の内容

序章では、清朝末期における西洋探偵小説の翻訳と、これに影響を受けて始まった中国の探偵小説創作について概括し、さらに当該ジャンルにかかわる研究史をまとめ、その問題点を指摘するとともに、本論文の問題意識と構成を明らかにする。

第Ⅰ部の第1章においては、劉顎の『老残遊記』（1903～6）をとりあげ、作品中で、裁判官が事件の解決を探偵役の主人公に託すこと、その探偵役が「ホームズ」と称されつつも、伝統的な「公案小説」の裁判官である包拯に近い形象を持つことを指摘し、同小説に窺える「公案小説」と「偵探小説」の交差のあり様を明らかにした。また、第7章で詳しく論じられる「探偵」に託された「医療」というイメージについても、初歩的な提示がなされる。

第2章においては、小説家でジャーナリストの吳趸人が、『中国偵探案』（1906）を編集する過程で、翻訳探偵小説礼賛の風潮を批判しながら、中国の能吏を「探偵」として捉え直そうとしていることを踏まえつつ、その話柄の取捨選択にあたり、同時期の迷信排斥運動の動向のもと、伝奇的な色彩で知られる包拯説話に見えるような、超自然的要素を持つ話柄が意識的に排除されている可能性を指摘している。

第3章においては、清末のジャーナリスト周桂笙が、その「偵探小説案」（1907）において、吳趸人『中国偵探案』における、能吏を探偵と見なす編集方針に異を唱え、同時代上海の租界警察である「包探」にまつわる話柄を、当時流行した「現状」批判小説のように、現実世界の事実として、批判的に描いていることを指摘している。

第4章においては、呂俠『中国女偵探』（1907）を構成する三篇の小説を分析する。その結果、ここには、現実世界から虚構世界を眺める視線と、新小説の読み手による小説世界への視線が、入れ子構造で描かれ、読者のいる現実世界と物語世界が、メタフィクショナルに反映された構造になっていることを指摘する。さらにその構造が、全能ではない男の能吏と、全能である女の探偵という対立項によって効果的に支えられることにより、吳趸人『中国偵探案』のような中国式的「能吏伝」から、西洋式の「偵探小説」への「跳躍」を志向するものであったことを指摘する。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部における「公案小説」と「偵探小説」のせめぎあいの先にある、中国の「偵探小説」創作の諸相を追う。

第5章においては、天民の「失珠」(1908)が、清末期に最も流行した翻訳小説であった「ホームズ物語」と、同じく大好評を博した『巴黎茶花女遺事』(小デュマ『椿姫』の林紓による翻訳)の特徴を合わせたような構成になっていることを明らかにし、本作品が西洋小説を模倣した結果、主人公とヒロインが、当時の中国では実現が困難であった「自由恋愛」や「自由結婚」をするなど、現実とは距離のある物語を展開してみせる舞台ともなっていることを挙げて、「偵探小説」が、やはり清末期の人気ジャンルであった「言情小説」ともリンクしていたとの見解を提示する。

第6章においては、傲骨の『砒石案』(1908)を採り上げる。本作品に見える指紋を用いた捜査について考察を行ない、それが当時の中国においては実現し得なかったものであり、ドイルの「ノーウッドの建築業者」などの指紋を扱った翻訳小説を参照しつつ、これを流用したものである可能性を指摘した。また、その事例を通じて、西洋の探偵小説が、科学技術や司法制度の教科書として読まれていたっぽうで、これらの物語世界の先進性と中国の現実世界の後進性との間に明瞭な齟齬をあらわにすることで、清末期「偵探小説」が、みずからジレンマを抱えることになったとも指摘する。

第7章においては、前章で扱った『砒石案』の続編にあたる『鴉片案』(1908)を取り上げ、本作品の主人公の探偵が、前作からさらに成長している点、また海外留学経験を持つ友人の協力を得て事件を解決している点などを挙げて、そこに「偵探小説」の新たな方向性がうかがえることを指摘する。また本作が、1906年に始まる「禁煙(アヘン禁止)運動」を背景として書かれた、アヘンの害毒を訴える小説の系譜上に位置づけられることから、これを同様の趣旨を持った「譴責小説」のような他の小説ジャンルと比較しつつ、本作品における事件とその解決の経緯において、当時の中国社会の現状を「病態」と見立て、探偵はそれを治療する「医者」に見立てられている可能性を指摘した。

第8章においては、南風亭長の「羅師福」(1909-10)を採り上げる。「中国で唯一無二の名探偵」とされる本作品の主人公の名「羅師福」は、「福爾摩斯(ホームズ)に師事する」との意を含ませたものである。本章では、羅探偵が、その捜査活動において、「顕微鏡」や「X光鏡」など、「透視」の科学技術を駆使しつつ肉眼では見えないものを読み取っていることに注目し、これらの発想の淵源を、当時の先端科学であった電気学や光学などの言説の中で明らかにするとともに、それを用いる探偵が、事件の真相のみならず、目に見えない社会の暗部の「現状」をも暴き出す役割を託された存在——「救国の英雄」としても描かれていたことを指摘する。

終章においては、論文全体を総括するとともに、今後の研究において解明されるべきいくつかのテーマ——角書きで「偵探小説」と標記しない小説の「偵探小説」的要素の解明、翻訳と創作の境界線を越えた複雑な様相の解明、パロディやパステーションなどの作品群への留意、台湾を含んだトランスナショナル的な文脈における研究——等を列挙して今後の課題とする。